

蔵屋敷の神さん今どこに

湯川 敏男

【目的】

昨年度は、『蜷川の面影を訪ねて』と題し、堂島の北側を東西に流れていた、今は無き曾根崎川（通称「蜷(しじみ)川」）とそこに架かっていた十橋を取り上げ、江戸期から昭和中頃までの、その変遷の歴史をたどった。

今年度は、昨年度取り上げた堂島をはじめ中之島、天満などに存在した、江戸時代の大阪で「天下の台所」の一翼を担った諸藩の蔵屋敷の歴史を振り返り、庶民と諸藩との接点でもあった蔵屋敷の屋敷神の詳細およびその後をたどり、幾多の変遷にも耐え、今日に伝えられた屋敷神に想いを馳せ、江戸時代の隠れた歴史を偲ぶ観光コースを設定する。

【内容】

蔵屋敷の屋敷神としては、西区の大阪市立中央図書館の西、土佐公園横に立地する岩崎弥太郎が創始した三菱グループ発祥の地、元・土佐藩蔵屋敷内の「土佐稻荷神社」が良く知られている。しかし、他の屋敷神については、その存在はあまり知られていない。

そこで、今年度は、江戸時代から今日に伝えられた諸藩の蔵屋敷にあった稻荷、天神や国元より勧進した屋敷神を調べ、とりまとめることとした。

明治維新後の廃藩置県、神仏分離令、神社合祀令、地震・台風・水害・大火の災害、今次の戦災などで廃社し、今は無くなった屋敷神がほとんどで、辛うじて現在に伝えられた貴重な屋敷神は、最盛期125邸もあった蔵屋敷の中で、僅かに11座であった。

幸運にも、数は少ないが、現地やその付近に存続し続けた屋敷神は5座、新たな場所に移転された屋敷神が1座、他の神さんに合祀された屋敷神が2座、新たな地に遷座された屋敷神が3座伝えられている。

これら11座の屋敷神の探訪の手引きとして、コース、概要、見所、案内図などを、まとめたパンフレットを『蔵屋敷の神さん今どこに & 蔵屋敷の神さん今ここに』と称し、とりまとめ、作成した。最後に、取材にご協力いただいた各位に感謝申し上げる。

【結果（今後の考察含む）】

今年度は、『蔵屋敷の神さん今どこに』をテーマに研究を進めたが、研究を進めるに従い、江戸時代の大阪には、蔵屋敷の他にも、川崎東照宮、大坂城代、町奉行所、大名屋敷などに勧進された神々があり、現在も継承されているものや、仏様で同じく継承されているものが多々あることが判明した。また、蔵屋敷と天神、御霊、坐摩、生玉などの祭りや庶民との関わりなどを、今後さらに引き続き、研究をつづけていきたい。

1. 蔵屋敷とは

江戸時代の大阪は、物流、商業の中心地であった。後世の人々はこれを「天下の台所」と称した。

その要因の一つは、堂島米市場（米会所）にあったが、そこには、商品の“米”はなかった。米は実は、西国の諸大名が年貢米や特産物を換金するため大阪に設けた「蔵屋敷」内にあった。以下に蔵屋敷について、その設置場所、数の推移、役割の概要を記す。

(1) 蔵屋敷の場所

蔵屋敷は、大阪の他に江戸、敦賀、大津、堺、長崎などにも存在したが、大阪は、日本のほぼ中心に立地し、水運にも恵まれた土地柄であったことから、次々と蔵屋敷が設けられた。当初は、中之島に多く集まり、天満、土佐堀、江戸堀がこれに続いた。その後、河村瑞賢の蜷川改修や堂島米市場開設により、堂島にも蔵屋敷が設けられるようになった。

(2) 蔵屋敷の数の推移

諸藩の蔵屋敷の大阪への進出は、時期もまちまちで、時代によって場所を移動する藩、複数の蔵屋敷を持つ藩、同じ土地でもあっても、藩の入れ替わりが存在するなど、その数は、時代により変化し、明暦元年（1655年）に90邸、最盛期の天保14年（1843年）には125邸にものぼり、明治維新直後の明治元年（1868年）頃でも98邸あった。

けれども、現在、蔵屋敷の建物で、残存するものは、天王寺公園内に移設され保存されている「黒田藩蔵屋敷長屋門」とあまり知られていないが、服部緑地内の日本民家集落博物館内に移設されている豊前時枝藩（5千石で大名ではない）の「堂島の米蔵」のみである。

(3) 蔵屋敷の役割

蔵屋敷の役割は、大きく4つに分かれる。1つ目は「蔵」つまり年貢米や領内の特産物を保管販売するために設けた**倉庫**。2つ目は「屋敷」すなわち参勤交代の途上で藩主が滞在するための**御殿**。3つ目は幕府との情報の**窓口**。最後の1つが今回のテーマ、稲荷、天満宮や国元より勧進の屋敷神などの**祭礼**の場で、後述するように、庶民も参拝した。

右図は広島藩蔵屋敷で、稲荷社や巖島社（国元より勧進）などの屋敷神が見られる。



これらの屋敷神は、明治維新後の廃藩置県、神仏分離令、神社合祀令、地震・台風・水害・大火の災害、今次の大戦などを経て、現在どのようになっているかを見てみよう。

土佐藩蔵屋敷内に存在していた屋敷神が西区の「土佐稲荷神社」として存続していることは良く知られている。しかし、他藩の多くの屋敷神は、残念ながら廃社となった。また、辛うじて新たな場所に**移転**したり、他の神さんに**合祀**されたり、新たな地に**遷座**したりした神さんもあった。数は少ないが、幸運にも現地や近辺にそのまま**存続**し続けた前述の「土佐稲荷神社」の様な神さんもあった。

調査時点で存在が判明した11座を表「諸藩大坂蔵屋敷屋敷神の現状」に示す。

No.	藩名等	神名	状態	場所
①	加賀藩	天神宮	移転	天王寺区・太平寺
②	黒田藩	天満宮	合祀	西成区・生根神社
③	久留米藩	水天宮	合祀	丸亀藩・金刀比羅宮↓
④	丸亀藩	金刀比羅宮	遷座	高松藩・金刀比羅宮↓
⑤	高松藩	金刀比羅宮	遷座	北区・露天神社
⑥	津藩	稲荷大神	遷座	三重県伊賀市本町通
⑦	土佐藩	稲荷大神	存続	西区・土佐稲荷神社
⑧	島原藩	稲荷大神	存続	北区・日本銀行大阪支店
⑨	宇和島藩	和霊神	存続	北区・中之島フェスティバルター
⑩	三田藩	稲荷大神	存続	西区・金光教玉水教会
⑪	小倉藩	稲荷大神	存続	北区・中之島センタービル

2. 蔵屋敷の神さん

(1) 蔵屋敷の神さんの種類

蔵屋敷の神さんの種類は、蔵屋敷に保管されている米、すなわち稲の神「お稲荷さん」、蔵屋敷の米や金品の出入を書き入れ計算するための学問上達の神「天神さん」、国元からの年貢米や特産物を運搬する船の海上安全祈願の神「こんぴらさん」、前述の蔵島社や久留米藩の水天宮、宇和島藩の和霊神社、熊本藩の清正公、明石藩の人麿神社などの国元より勧進した神さんなど種々あった。

(2) 蔵屋敷の神さんと庶民

神社仏閣の参詣者数のランキングを相撲の番付風に表した見立て番付『神社祭礼仏閣法会浪華参詣大数望』（天保12年）の東之方の2段目に、「御屋敷祭」として蔵屋敷の屋敷神の祭礼が載せられている。そこには、阿波、鍋島、出雲、中国、筑後、米子、宇和島、亀井、明石の各藩と丸亀藩、高松藩中之島こんぴら祭が挙げられており、多くの庶民が参拝したことがわかる。

暁鐘成著の『浪華の賑ひ』（安政2年）には「高松金比羅社」の項があり、「夜店ありて賑わし門前の通りの町を俗に金毘羅町といふ」と記されている。

さらに、「高松金比羅社」については、寺社の台所事情を記した『浪華大紋日こがねの山』（天保元年）と題する祭礼時の賽銭のランキングを記録した刷り物にも「讃岐やしき金ぴら」として「一ヶ年さいせん高凡四千メ文ヨ 十月十日さんけいことニ多し（貫はメとも表す）」と、蔵屋敷内を一般公開し、年間に現在のお金に換算して約1億2千万円の賽銭収入があったことがわかる。

これらは、いかに日常的に蔵屋敷の神さんが庶民（浪速っ子）に溶け込んでいたかを示している。

(3) 蔵屋敷の神さん今どこに

明治維新後の廃藩置県等の荒波などを乗り越えて、現在その存在が確認できる諸藩の蔵屋敷屋敷神11座の現状を以下に記す。（詳細については別紙「大坂蔵屋敷屋敷神存続状況集成」を参照）

①加賀藩蔵屋敷屋敷神（天神宮）移転

前田家が先祖と崇める菅原道真公を祀る蔵屋敷内にあった天神宮の社殿・拝殿など一式を**天王寺区・太平寺**に移転した。今次の大戦で天神宮の社殿・拝殿共焼失し、鳥居のみが残存。

②黒田藩蔵屋敷屋敷神（天満宮）合祀

蔵屋敷内に祀られていた筑紫天満宮を黒田公が数ある引取希望先から**西成区・生根神社**への合祀を望まれ、天満宮社殿と石燈籠、天神牛などを移設。今次の大戦で社殿は焼失。石造物は残存。

③～⑤は集約して記述

③久留米蔵屋敷屋敷神（水天宮）合祀

④丸亀藩蔵屋敷屋敷神（金刀比羅宮）遷座

⑤高松藩蔵屋敷屋敷神（金刀比羅宮）遷座



久留米藩が明治政府に蔵屋敷を返上、蔵屋敷内に祀られていた水天宮は、丸亀藩蔵屋敷の金刀比羅宮に合祀（社殿は松島の天満宮御旅所に流用）。しかし、丸亀藩も返上することになり、高松藩蔵屋敷の金刀比羅宮に遷座。その後、高松藩も返上し、堂島中二丁目に遷座。さらに、明治42年の「北の大火」で被災のため、**露天神社**の境内末社「**水天宮・金刀比羅宮**」として祭祀。（上図参照）

⑥津藩蔵屋敷屋敷神（稻荷大神）遷座（元木村重成川崎邸の鎮守、大坂の陣後に藤堂家が入居）

廃藩置県後の跡地は、造幣局となったため、稻荷社は、明治3年（1870年）に同地より三重県伊賀市上野中町に遷座。明治43年（1910年）に神社合祀政策により上野東町の菅原神社に合祀されるが地元の強い要望により、現在地に戻座。社名は「**万吉稻荷社**」。

⑦土佐藩蔵屋敷屋敷神（稻荷大神）存続

藩蔵屋敷に隣接する長堀川に架かる鰹座橋のほとりに神社が祀られていた。この神社に第6代藩主、山内豊隆が、伏見稻荷から稻荷大神を勧進し、「**土佐稻荷神社**」とし、現在に至る。

⑧島原藩蔵屋敷屋敷神（稻荷大神）存続

蔵屋敷跡地は、維新後の明治4年（1871年）駅通司大阪郵便役所、明治18年（1885年）五代友厚邸、明治36年（1903年）に日本銀行大阪支店が入居、同地の稻荷は、昭和57年（1982年）の新館増設時に同館屋上に移設。なお、「**稻荷神社**」は非公開で写真撮影・参拝には特別な許可が必要。

⑨宇和島藩蔵屋敷屋敷神（和霊神） 存続

蔵屋敷内には、和霊神（宇和島藩家老・山家公頼を主神）が祀られていたが、明治18年（1885年）に蔵屋敷跡地に朝日新聞社が入居（祠は中庭に鎮座）、大正5年（1916年）の新社屋建築時に、地下1階に移転（この時に、伏見稻荷を合祀）、昭和40年（1965年）の中之島地下街工事にともない昭和43年（1968年）竣工の朝日新聞ビル13階屋上に、平成24年（2012年）の中之島フェスティバルタワー新築時に同館13階西側スカイテラスに移設。社名は「朝日稲荷大明神」。

⑩三田藩蔵屋敷屋敷神（稲荷大神） 存続

蔵屋敷跡に明治5年（1885年）玉水小学校（沿革を経て現西船場小学校）が創立された。その後、学校の統廃合で空き地となり、昭和10年（1935年）、跡地に金光教玉水教会が新築され、同地の鬼門（艮＝うしとら：東洋の12方位の丑と寅の間＝北東）角地に鎮座。社名は「荒光稲荷大明神」。

⑪小倉藩蔵屋敷屋敷神（稲荷大神） 存続

明治5年（1885年）に蔵屋敷跡地に郵政、電電公社関連の施設、さらに昭和50年（1975年）中之島センタービルが建てられ今日に至っている。蔵屋敷の屋敷神の記録は不明であるが、敷地東側植込み内に鎮座する祠が屋敷神に相当すると考えられる。社名は「玉吉稲荷」。

（4）蔵屋敷の神さん今ここに（①～⑪は前章の項番）

現在、その存在が確認できる、前章に記載の11座の神さんの現状を巡る観光コースを、比較的屋敷神が集中している中之島周辺区域と、分散して存在する地域とに分けて提案する。

①蔵屋敷の神さんパワスポベルト地帯コース

北区・露天神社に遷座した③久留米藩（水天宮）、④丸亀藩と⑤高松藩（金刀比羅宮）、中之島に今も残る⑧島津藩（稲荷）、⑨宇和島藩（和霊神）、⑪小倉藩（稲荷）、近在の⑩三田藩（稲荷）、それに中之島に点在する蔵屋敷跡を合わせたパワスポベルト地帯を巡る約2時間のコースを設定する。



②周辺の観光スポットと巡るコース

前項の「蔵屋敷の神さんパワスポベルト地帯コース」から外れた①加賀藩（天神宮）、②黒田藩（天満宮）、⑥津藩（稲荷大神）、⑦土佐藩（稲荷大神）は、それぞれ、周辺の観光スポットと合わせて巡るコースが設定できる。（詳細は別紙「大坂蔵屋敷屋敷神存続状況集成」を参照）

①②のコースの案内パンフレット『蔵屋敷の神さん今ここに & 蔵屋敷の神さん今ここに』を作成したので探訪の折の参考にさせていただきたい。

<参考文献>

- 『大坂大阪変遷を古地図・古写真で追う』 学習研究社 2008年
- 『中之島誌』中之島尋常小学校幼稚園創立記念会 臨川書店 1974年
- 『キタ』一風土記大阪―宮本又次 ミネルヴァ書房 1964年
- 『大阪再発見』一中之島界隈藩蔵屋敷跡―岡本吉富 牧歌舎 2008年
- 『なにわ大阪再発見』第4号,第6号 なにわ文化研究会 2001年,2003年
- 『大阪人』特集：中之島（財）大阪市都市工学情報センター 2009年
- 『月刊島民』Vol. 32, 54, 61, 73, 78の各号 月刊島民プレス 2011～13年
- 『大阪春秋』第13号 特集：天満堂島中之島 大阪春秋社 1977年
- 『堂島の歴史』堂島界隈歴史散歩 大阪堂島マーカークラブ 1977年
- 『葦火』29, 64, 78, 81, 86, 88, 90, 95, 97, 99, 102の各号 大阪文化財研究所
- 『大坂町奉行管内要覧』大阪市史料第十五輯 大阪市史編纂所 1985年
- 『おおさか図像学』近世の庶民生活 北川央 東方出版 1985年



SPECIAL THANKS

- ・護国山太平寺
- ・生根神社
- ・土佐稲荷神社
- ・朝日新聞社
- ・日本銀行大阪支店
- ・金光教玉水教会
- ・加賀藩蔵屋敷神【天神宮】
- ・黒田藩蔵屋敷神【筑紫天満宮】
- ・土佐藩蔵屋敷神【土佐稲荷神社】
- ・宇和島藩蔵屋敷神【稲荷神社】
- ・島原藩蔵屋敷神【稲荷神社】
- ・三田藩蔵屋敷神【稲荷神社】